昭和61年(1986年)4月10日　教皇様の聲　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
4
APRIL, 1986　毎月10日発行　第72号

教皇様の聲

私たちが苦しむとき神はどこにおられるのか

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1986
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

私の魂は主をあがめ、と（ルカ1・46）マリアは賛美を謳いはじめる。自らの信仰と経験をもとに流れるが如く主を賛美します。まことに主は偉大な創造主、全世界を存在させる御方です。お国の山景色のように美しい自然には、創造主の威厳のいくばくかが輝きわたっている。神は人類史における偉大な御方、国々を興こし、国々を滅ぼす御方です。選ばれた民をエジプトの地から救い出し、約束の地へと導かれた。神は個人の一生においても偉大な御方、マリアを始め、歴史上模範として輝いてはこの世を去った数多くの男女の一生において偉大な御方であります。しかしその神は、私自身、そしてみなさん方一人ひとりの生涯にとっても偉大な御方。私たちに生命を与え、日々刻々私たち自身と私たちの所有物を支え、永遠の生命に招いてくださる。

緊急問題

青年代表の方が、愛する人を失ったり不運に見舞われたりしたときには、神の現存を信じることすら難しい、とおっしゃいました。確かにこれは緊急の問題です。神は偉大で力強く愛にみちた御方であるのに、私たちが苦しむ時どこにおいでになるのか。アウシュビッツや広島、長崎で、神はどこにおられたのか。子供たちが飢え、男女が苦しみ悩み、若人が死に至るとき、神はいずこにおいでになるのか。創造された世界を見れば、神の存在、その知恵と力と善性が見えるのに、悪と苦しみに目をやると、神の像（姿）は暗闇につつまれる。

右のような問いかけに答えるのはそう簡単なことではありません。それは、信仰を難しくするもの、すなわち苦しみは、信仰によらなければ深く理解することができないというところからくる難しさのためです。聖書の冒頭には、神はすべてをよきものとしてお造りになったとあります。悪と災難は原罪の結果であって、人祖は自由を濫用し、神から離れてしまったのです。人祖は、神なしに、神のごとくなろうとした。そのとき以来、聖パウロが言うように、全被造物は「はかなさに服従させられ、今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っている」（ローマ8・22）のです。この世における苦しみは全て、少なくともそのある部分は、人間がもたらした混乱の結果であります。神は悪をおゆるしになるが、それは人間の自由を尊重なさるからであり、また全てを、最悪のものでさえ、愛する人々のために、善に変えることがおできになるからなのです。

私達を悪の力から救う者は

マリアの言葉に耳を傾けましょう。「私の精神は、救い主である神により喜びおどります。」（ルカ1・47）苦しむ人類は救い主である神を見つけることができる。神は偉大な創造主。それればかりか、偉大な救い主、いつくしみ深い御方。卑しく低い私たちに御目を留めてくださる。（ルカ1・52参照）

神はどのようにして私達を悪から救われるのか？

神が私たちを悪からお救いになるのは、イエズス・キリストの救いによってであります。神御自身が、測り知れないほどの愛の心から、人、つまり「共にいます神」となってくださった。イエズス・キリストが私たちと共に生活し、私たちの運命を御自身のものとなさった。イエズス・キリストは従順によって不従順を、愛によって愛の不足を、癒してくださった。十字架上の苦しみを通して私たちの科を消し、死によって新たな生命、永遠の生命をかち得てくださったのです。

死と苦しみの意味

死と苦しみの意味については、イエズス・キリストほどに確たる説明をすることはできません。主の十字架は苦しみの意味を明かします。外側から見ると、ナザレトのイエズスの刑死は無意味であった。しかし、信仰の目でみれば、イエズス・キリストの苦しみには救いの力がある、従って、まことに深い意味のあったことがわかります。同じく外から見ると死は命にまさった。しかし、死者のうちから復活したイエズス・キリストを見ると、信仰の目によって、命が死にまさることがわかるのです。キリストはその十字架と復活によって、罪と死の力から私たちを救ってくださった。イエズスの苦しみのおかげで私たちの苦しみは意味を与えられ、イエズスの復活によって私たちの死は克服されたのです。（ローマ6・5参照）

「キリストの十字架において、苦しみを通して贖いが実現しただけでなく、苦しみそのものも贖われた。」（『サルヴィフィチ・ドローリス』19〈救いをもたらす苦しみ〉）というわけで苦しみがあるからと言って神が見えなくなることはありません。苦しみこそ、私たちの間での神の特別の現存を証すものであり、より一層近くからキリストに従えという招きなのですから。（…）

祈れば神を賛美できる

祈るとき、私たちは神を称えることになります。祈りのない信者の生活など考えられません。イエズス御自身もほんとうによくお祈りになった。（マテオ14・23、ルカ6・12参照）この世の悪の力に対抗するにあたり、最も強力な武器は祈りです。ただし、

私たちが困っていることを神に話すだけが祈りではない。神が私たちに何をお望みになっているかを知るために、沈黙するのも祈りなのです。ですから、みなさん、勇気を出して祈り、そして、静寂のなか、しずかに語りかける神の声に耳を傾けてください。

日曜日の聖体祭儀に与れば神を賛美できる

日曜日にミサに与ることによって神を賛美します。主日を聖化するためにこれ以上に良い方法はないと思われます。聖体祭儀に与る毎に、私たちは一致して、神のおことばに耳を傾け、神が私たちのためにしてくださった偉大なことに対し心から感謝します。また、イエズスの御名において真のキリスト者としての生き方をするための力をお願いします。ミサに与る毎に、主の死と復活を祝い、より一層深くイエズスを知ることができるのです。時として日曜日の聖体祭儀に与るためにかなりの努力を要することもあるでしょう。とは言え日曜日にミサに与る義務をしっかりとみなさんの心に刻みつけていただきたい。練習を避けるようなスポーツ選手は良い成績をあげることなどできません。少なくとも日曜毎に可能なイエズス・キリストの出会いを無視するならば、信仰を深める機会を逃がすことになります。「信仰の神秘」をより一層深めるために、霊的助けを与えてくれる人と、よく話し合ってみてください。

定期的に赦しの秘跡に与れば神を賛美できる

神は慈しみ深い御方ですから、私たちは罪を告白しなければなりません。罪を告白するたびに私たちは神の慈しみを賛美することになります。若い人たちの間には個人的な告白について知らなかったり、個人的な赦しの秘跡に与らなかったりする人が多いということはよく知っております。私はみなさんを励まして、広く忘れられているこの秘跡の再発見を促したいと思います。やってみる値打ちがあります。罪を赦すイエズスは必ずや、人生途上に出遭う色々な困難を克服する力を与えてくださるでしょう。みなさんを理解しようと努める司祭ならば、みなさんが神のお望みになっていることは何であるかを知るために、大いに力になってくれるにちがいありません。

生活全体で神を賛美しよう

私たちの生活全体は神賛美に加わるものでなければなりません。日曜日だけでなく、週日にもみなさんの信仰を人々に見せるべきなのです。あまりキリスト教的とは言えない環境に住むみなさん方にとって、信仰に則って生きるには勇気がいることでしょう。しかし、元気を出してください。要理の勉強に熱心になれば、人々は笑うかもしれません。教会に行くから、あるいは、みなさんが習いそして信じていることを話す時、彼らは皆さんを笑いものにするかもしれない。しかし、そんな人々の態度を気にとめないで。皆さんは同じ心の人々と一緒になり、互いに信仰を強めるよう助け合ってください。

富で神を賛美できるか?

みなさんは豊かな国に住んでおいでになる。それは喜ばしいことです。けれども、そのためにみなさんが負うべき責任の大きさをも自覚して欲しい。私たちは富によって神を賛美することができるでしょうか。マリアの「マニフィカト」は重大な警告を発しています。「飢えた人をよいもので満たし、富む人を空手で返される」(ルカ1・53)と。物質的な豊かさはそれ自体よいものです。ただし、私たちがそれに心を執着させていなければ、という条件づきで。消費主義も、私たちが魂を奪われてしまわないかぎり、それ自体悪いとは言えません。しかし、私たちは持ち物に心を奪われ、それに依存してしまう危険があります。ですから、意識してわざと離脱の心を実行しましょう。楽を、そして快楽をみだりに求めるあまり、自分自身と周囲の環境を破壊することさえできるのが私たち人間なのです。シンプル(簡素)な生活を営みたいものです。皆さんの富や幸せを困っている人々とわかち合い、それらが祝福となるように努めてください。こうして「飢える人人をみたす」という神の御約束をみなさんが果たすことになるのです。みなさんはこの約束に期待をかけることができます。神はみなさんの犠牲に寛大に報いてくださいますから。

伴侶を求めている人々へ

自らの家庭を築くために伴侶を求めているみなさん。夫婦間の愛は神がお恵みになるすばらしい、また美しい贈り物です。ということは、互いに責任をもたねばならぬということになります。キリスト信者にとって夫婦愛とは、単に個人的な事柄にとどまるものではありません。聖書によると、夫婦の愛(夫婦行為)は人類への愛の象徴(ホゼア2・18〜25参照)、キリストの教会に対する愛の表象(エフェゾ5・21〜33参照)です。神は信実な御方、そしてキリストの愛は取り消されることのない愛(ヘブライ9・11、10・18参照)です。それゆえ男女のこの行為は、婚姻の絆が結ばれたあと、つまり、神と教会の前で互いに決定的な約束をしたあとでないと、認められない行為であります。大勢の人々の経験から見ても、婚前交渉がふさわしい結婚相手捜しをかえって難しくすることは明らかです。

良い結婚の準備をしよう

結婚のためのよい準備というとき、そこには、人格の形成と強化が含まれています。また、結婚の準備をしている者にふさわしい愛の表現を育まなければならない点も重要です。待つこと、そして、自己を抑えること(自己否定)、この二つが将来のパートナーに対して本ものの愛にあふれた配慮をするに当たり大いに役立つことでしょう。(…)

私は右のように考えていない人々が大勢いることはよく知っています。「時流に逆らって」生きることの難しさもよくわかっているつもりです。私はみなさんの生き方を一層難しくするような事柄について話しているのではありません。ここに述べた事柄は人の尊厳に関することであり、最終的には、みなさんが地上において幸せになり、永遠の救いを得るためにも、すこぶる役に立つことであると確信しています。

もう一つの召しだし

みなさんの愛に実を結ばせるためにもう一つの道があることも忘れないでください。すなわち、天の国のため自由に独身あるいは童貞性を選んで、司祭または修道者としてキリストに従う召しだしのことです。神はこのような道に私を呼んでおられるのではないだろうかと真面目に考えてみてください。神さまに召されているのではないかと感じている人に一言。はっきりと道がわかるように絶えず祈り続けてください。そして、よろこんで「はい」と応えてください。召しだしに応えることによって放棄する事柄に対して、神はゆたかに報いてくださることでしょう。マリア様は処女として母として、全生涯を神に仕えるためにささげました。(ルカ1・26〜38参照)マリアのように全てをささげて主に仕えるとき、私たちはみごとに神を賛美することになるのです。(リヒテンシュタインにて。一九八五・九・八)

説教・講話・書簡等の抄訳

人はみな種まき人であり、刈り入れ人

私たちは新約の神の民です。「大いなるできごと」を過去に見、今も経験しつつあります。このことを頭において答唱詩篇を読むと、心は喜びに満たされます。実に私たちは福音の民。救いを告げる、喜びあふれた良い知らせを受けたから。

見よ、救い主イエズス・キリストは「死を滅ぼし、福音によって命と不朽を輝かされた」(ティモテオ②1・10)。

この光の方へ歩み寄っているでしょうか。闇に追いつかれないよう(ヨハネ12・35)、キリストをいつも探し求めているでしょうか。跳梁する闇の力によって、この光がたやすく消されるのを許してはいないでしょうか。

キリストは、私たち人間の生命を輝かせてくださいます。マルコの福音書には、そのすばらしい実例が記されています。キリストは盲人バルティメオの目をひらかれました。

「先生、見えるようにしてください。」

「行け、その信仰があなたを救った。」(マルコ10・51〜52)

そうです。信じる人はつねに救われます。福音の光を手に、「信仰の器」であるべき私たちの生活を照らしましょう。

この器が壊れてしまわないよう、気をつけていなければなりません。何者にも壊されることのないように。いかなるプログラムやイデオロギーによっても、いかなる人間にも、周囲の状況や環境がどうあろうと、破壊されることがあってはなりません。信仰は、心の宝です。

時には信仰を持たない人でさえ、この事実を証しします。信仰を失った人や、いまだ信仰を得ることができないでいる人々までもが。そこで祈りたいものです。「主よ、私たちの信仰を増してください」(ルカ17・5)と。または、福音書の他の箇所にあるように「私の不信仰を助けてください」(マルコ9・24)と。私たちもこのように祈り、人生における「究極の意味」を見失わないようにしたいものです。

洗礼によって神に属する

神は私たちに偉大なことをなさいました。見よ、イエズス・キリストを、十字架につけられ、上げられた「永遠の司祭(ヘブライ5・2)」を。ヘブライ人への手紙の著者によればこの司祭は「無知な者と迷う人々に同情することができる」(ヘブライ5・2)。私たちに対しても、また、たぶん何も気づかないでいる人たちにも、永遠の司祭職の消えない印を身につけた人々にも、すべての人に対して、「同情することができる」のです。

本日は、どのくらいの人がお集まりになったのでしょう。この小教区で何人が洗礼をお受けになるのでしょう。洗礼を受けるとは、永遠の司祭であるキリストの消えないしるしを霊魂に受けるということです。

この特別なしるしによって、人はキリストのために聖別され、神に属するようになります。私たち一人ひとりのために、死んで上げられた御子に似たものとして、御父に属するものとなるのです。

「主は私たちに偉大なことをなさった。」これらのことは、外からはわからなくとも、人間の霊魂の奥底にしるされています。

もう一度、詩篇に目を向けてみましょう。刈り入れ人について語っている詩句は、私たちにぴったり当てはまるように思われます。

「涙のうちに種まく者は、喜びのうちに刈りとる。まく種を持って、涙しつつ出ていき、束を手にして、喜びいさんで帰りくる。」(詩篇125(126)・5〜6)

「刈り取る者」と「種まく者」。人生のたとえそのものです。

いま私は、このたとえがすべての人一人ひとりにあてはまるよう心から願っています。この小教区のみならず、あらゆる所で。

人は誰でも自分の人生の種まき人であり、刈り入れ人です。自分のまいたものを取り入れ、働いて得たものを手にします。刈り入れが祝福に値するものでありますように。詩篇の言葉が皆さん一人ひとりに実現しますように。皆さんが、御父のもとへ「束を手にして、喜び勇んで」帰りつくことのできますように。

「永遠の戸」のもとにたどりついたとき、私たちは明るい光の中で見、心のかぎり繰り返すことができるでしょう。「大いなるかな、すばらしきかな、主がわれらになされたことは……!」

ご一緒に、信仰の目にうつるこの最終目標に向かって出発しましょう。

(十・二十七)

天地の創造主

信仰と道徳シリーズⅧ

1　「われは天地の創造主、全能の父なる天主を信じ……」。

御自身を示された神、私たちが信じる神は、限りなく完全な霊であります。限りなく完全な霊であられるので、神は真理と善とに完全に満ちておられ、御自身を与えることをお望みになりました。実に、善とは自ら広がり行くものです。(『神学大全』Ⅰ, q. 5, a. 4, ad. 2)

神は無限の善である、この真理は、神が天地の創造主、見えるもの、見えざるものすべての創造主であると述べる使徒信経の中で、ある意味では表現されています。創造に関する真理については後ほど取り上げることにして、神における創造の秘義に該当するものを今、啓示の光の下で一通り見ておくのもいいでしょう。

2　教会は、神は全能であると宣言(「われは全能の父なる天主を信ず」)しますが、神は限りなく完全な霊であるゆえ、全知でもあるわけです。つまり、神の知識はあらゆるものを見通します。

この全能にして全知の神は、創造の力、すなわち何も存在していない状態から存在を、無から有を生じさせる力、をもっています。「主にとって不可能なことがあろうか」と創世の書十八章十四節の述べるとおり。

「あなたの偉大な権勢を示すものは、いつもあなたの御手の中にある。あなたの腕の力に抵抗できるものがあるだろうか。」これは知恵の書(11・21)の言葉です。またエステルの書では、「主よ、全世界の主である主よ、あなたのみいつのもとにすべては服従します。あなたに逆らえるものは、一人としてありません」(4・17b)という言葉で同じ信仰を宣言しています。そしてお告げのとき、大天使ガブリエルは、「神におできにならないことはありません」とナザレトのマリアに語るのです。

3　預言者たちの口を通して御自身をお示しになる神は全能であります。この真理は「神が……『あれ』とお

聖母月の五月をひかえ、『ナザレトのマリア』(定価二〇〇〇円ロ送料三〇〇円)、『子供と秘跡』(定価七五〇円ロ送料三〇〇円)、絵本『ペトロおじさんの仕事』(定価八五〇円ロ送料三〇〇円)をおすすめします。

不変の教え

おせられた」(創世の書1・3)という創世の書の最初の言葉から始まって、啓示全体を貫くものです。創造のみわざは、「主が言えば、ものは存在し……」(詩篇32(33)・9)と、神の言葉の力強さで明示されています。無からあらゆるものを、存在しない状態から存在を造ることによって、神は自ら広がる限りなき善の充満である御自分を啓示なさいました。「存在する」神、自立的な存在である御者、限りなく完全な存在は、見えるものと見えないものの宇宙、すなわち被造物を、御自分の外に生じさせることによって、ある確かな意味で御自身「存在そのものである」ことをお示しになるのです。物を造ることによって、神は宇宙の歴史をお始めになり、人間を男と女とに造ることによって、人類の歴史をお始めになりました。創造主として、神は歴史の主であるわけです。「働きはいろいろあるが、すべての人にすべてを行なわれる神は同じである」(コリント①12・6)

4　創造主、従って世界と人間の歴史の主として御自身を啓示なさる神は、全能の神であり生きる神……であります。第一バティカン公会議によれば、「教会は、まことの生きた神が唯一であることを、天地の創造主であり、全能であることを、信じ宣言する」(DS 3001)この神は、限りなく完全な全知の霊であり、創造という行為そのものに関してさえも、絶対的に自由であり全権をもっておられます。もし神が、その創造し給う一切のものの主であるならば、神はまず第一に創造の御業に働いた御自分の意志の主であられるわけです。神は創造しようとお望みになったゆえ創造なさった。神は創造なさいましたが、それは創造が神の無限の知性に従っているからです。お造りになるとき、神は計り知れない自由に満ちみちて、永遠の愛に動かされて行動なさいます。

5　第一バティカン公会議の文書『デイ・フィリウス』をすでに幾度も引用してきました。そこでは、創造のみわざとそのすべての行為が神の絶対的に自由な行ないであることを強調しています。神は「自身において、自身について、至福な」者である。自身において、自身について、神は善性と至福の完全な充満であられます。世界を存在させるに当たって、神は、御自分の善性をより完全にし整えるためにではなく、もっぱら、いろいろな存在の善を目に見えない被造物と目に見える被造物の世界に与えるために、そうなさいました。それは、唯一無類、無限で永遠の善、すなわち、まさに神の存在そのものであるこの善を、被造物が多種多様なかたちで分有することであります。

かくして、創造のみわざにおいて全く自由に支配なさる神は、造られた宇宙とは根本的に独立した存在であられるわけです。これは、神が被造物に対して無関心であるという意味では決してありません。むしろ、永遠の上知、愛と全能の神として被造物を導いてくださることを意味するものと言えましょう。

6　聖書には、神がこのみわざを単独でなさった旨のべてあります。預言者イザヤは「私はすべてを造った主である。私だけが天をひろげ、地をのべた。――私と共にいた者があるか」(イザヤ44・24)と言っています。神がお独りでなさった創造の御わざには、神の卓越した自由と父としての全能が際立っています。

「彼は地を形どって、つくりあげた神である。彼はそれを固められた、それを、混沌のために造られたのではなく、人が住むようにとつくられた」(イザヤ45・18)

「預言者を通じて語られたが、この世の終わりの日々には……その子を通じて」(ヘブライ1・1~2)御自分を啓示なさる神のおことばに照らされて、教会は当初から、「全能の父」、天と地、見えるもの見えざるもののすべての創造主を信じる、と宣言しています。この全能の神は全知にして遍在なさる神。もっと正確には、神は限りなく完全な霊にてましますので、同時に、全能、全知、遍在の神である、と言うべきでしょう。

7　何よりもまず、神は唯一にして聖三位一体の中に御自らに対して現存なさる御方です。また、神御自身お造りになった宇宙の中に現存なさるが、それは、神の創造の御力(per potentiam)によってなされたみ業の結果によるのであって、そこでは超越的本質そのもの(per essentiam)として現存なさるのです。この現存は世界を超越し、世界に浸透し、世界の存在を保ちます。同様のことが、知識を通じての神の現存についても言えましょう。すなわち、神は無限に力ある視線をなげかけるだけで、あらゆるものを看破し透徹なさる(per visionem / per scientiam)が、最後には特別な方法で人類の歴史、それはつまり救いの歴史でもありますが、その人類の歴史の中に現存なさるのです。これは、言い方によれば最も「パーソナル」な神の現存であります。つまり、恩寵を通しての神の現存であって、人類はイエズス・キリストにおいて、満ちあふれるところから、この恩寵をうけたのです。(ヨハネ1・16~17)

8　「主よ、あなたは私をさぐり、私を知られる……」(詩篇138(139)・1)
霊感をうけたこの詩篇の言葉をくり返しつつ、世界各地にいるすべての神の民の構成員と一緒に、我らの創造主、父にして摂理であられる神の、全能、全知、遍在を信じる、と宣言しましょう。「私たちは神の中に生き、動き、存在するものです」(使徒行録17・28)

慈愛による裁き
『和解と悔悛』より

主イエスご自身が、万民に与えられる慈しみと愛の賜として、洗礼後に犯した罪を赦すために特別の秘跡を制定し、教会に委ねられたことは確実であります。

司式形式は長い時代を経て発達してきましたが、この秘跡の本質について、教会の確信に変化はみられません。キリストの命令により、聴罪師が与える秘跡的赦しを通して赦しは一人ひとりに与えられます。(…)

第二の確信は、告解する人にとって、告解の秘跡がどのような働きをするかについてであります。昔からの伝統的な考えによると、告解の秘跡は一種の裁判ですが、一般の裁判のように厳格な正義によるのではなく、むしろ慈愛による裁きの座と言うべきです。(…)

三番目は特に強調したい点で、赦しと和解の秘跡を構成する要素、あるいは部分に関するものです。(…)

何よりもまず、告解する人の良心が正しく明瞭でなければなりません。(…)この良心を明瞭にする秘跡的なしるしが伝統的に「良心の糾明」と称される行為です。

ところで告解する人にとって絶対に必要なのは「痛悔」、すなわち犯した罪を断固として忌みきらい、再び犯さぬという決心をすることです。

教会は、ゆるしの秘跡のうちに「罪の告白」を含めています。(…)たとえだれかに心を開くことが正当で自然な要求であるとしても、罪の告白を、心理的な自己解放の行為と考えるわけにはいきません。罪の告白は典礼行為なのです。かくて「罪の告白」は通常、集団の行為ではなく、個人的行為であることがわかります。罪が徹底的に個人的な事柄であるのと同じように。

この秘跡の本質をなすもう一つの面、それは裁判官であり同時に癒す者としての司祭、立ち返る人を迎え入れて赦す父なる神の象徴としての司祭の役目のこと、つまり「罪の赦免であります。(…)

告解の秘跡をしめくくる行為は、「償い」です。(…)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替
神戸
3-72393